自称ワンダーランドから

八神のはら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自称ワンダーランドから

【Ｎコード】

Ｎ７４５５Ｓ

【作者名】

八神のはら

【あらすじ】

どこまでも続く紫色の空、青緑色の足の長い草、そして火を噴く巨大なドラゴン……。エレベーターの扉の外は異世界でした。

せんせーせんせー。ワンダーランドってなんですかー？

夢の国（ワンダーランド）＝誰しもが憧れる理想郷（ユートピア）。
ゼリーの海にお菓子の家。空はどこまでも蒼く、白い鳩とカラフルな風船が飛び交い、善良な人々は今日も朗らかに笑う。そんなメルヘンチックなところ。

自称夢の国（ワンダーランド）＝何でもありの危険地帯（ブラックゾーン）。
銃刀法違反、暴行殺人。壁は蹴破るものでしょう？　カラフルな風船や白い鳩の代わりに銃弾が飛び交い、はちゃめちゃな奴らはケラケラと笑う。そんなアンメルヘンなところ。

私の行き先はメルヘンチックな夢の国？　そんなわけないお約束。
私の行き先は、アンメルヘンな夢の国。自称ワンダーランドです！

1：どこかにて

今日もオレンジジュースを飲みつつ、キーボードをカタカタ叩く。
今日中にデータ入力をして、そのデータを首なし工場に届けなければいけないんだけど、イマイチやる気がでない。無性にデスクを片付けたくなる。チラリと隣を見ると、相変わらず肌の黒い同僚が、脇目も振らずに画面を見つめて、キーボードをカタカタ叩いていた。

「ねえルーロ、それ、楽しいの？」
「普通だ。それより仕事をしろ、ただでさえ人が少ない」
「やーん、冷たーい」

感じが悪いのはいつものことだ、気にしていたらキリが無い。
席を立ち、肌の黒い同僚……ルーロに抱きつき、彼女がさっきから見つめている画面を私も見つめる。鬱陶しい、退けなどの色々な声が飛んできたが、聞こえていないふりをした。
首なし工場、パンドラ、見世物小屋、異世界、動力源……。色々な単語が所狭しと並んでいる。私はそれを適当に眺めていると白い矢印が動き、ページの上にあるマークをクリック。カチッ、と音がして画面が切り替わった。ページタイトルは動力源。画面には、色々な長さのグラフが映っている。

「……最近、動力源となる異世界の子供が減ってるね」
「まあ、不幸な子供が減るのはいいことではあるがなぁ。だが、動力源が必要なのも事実だ……どうしたものか」　ふぅ、とルーロがため息をつく。
「適当に攫ってくればいいんじゃなーい？」
「お前……。それは本気で言っているのか？」

「本気だよ？　だって、この世界が消えるなんて嫌だもん。ここは私にとっての夢の国なんだからさー」
「ふん。自分の幸せの為なら、他人を犠牲にしてもいいとでも？」
「そうだけど。だって、他人の痛みなんて私にはわからないじゃない？」

ルーロが私を睨みつける。私もルーロを睨みつける。ピン、と空気が張り詰め、静寂と殺気が部屋を支配する。

「……動力源探しにいってきまーす」

それからどれくらい睨みあっていたのかはわからないけど……私はこの嫌な空気に耐えられず、白旗をあげた。女の子とする喧嘩は好きじゃないんだ、野郎となら大歓迎だけど。
そして、一秒でも早くこの嫌な空気の部屋から脱出したいので、外側をまわることにした。椅子に掛けてある制服のジャケットを羽織り、扉へ向かう。

「ロール」

ロールとは私の名前だ。それにしても、ルーロが私の名前を呼ぶなんて珍しい……何か言われるのかな？
恐る恐る振り向くと、私に背中を向けたままの状態で、ルーロが何かを投げつけてきた。突然のことに一瞬動きが遅れたが、何とかそれを両手でキャッチする。刹那、ちゃぷんという音と、手のひらに伝わる微かな重み。それは「１００パーセントオレンジジュース」という文字と、微妙に可愛くない変なキャラクターが描かれた缶だ

った。思わずルーロを見る。

「……早く行け」

あーもうこの子、女の子なのに何でこうもカッコイイのかなぁ。どこかの乙女みたいにドキッとした私も私だけど。

受け取ったばかりの缶を開けてオレンジジュースを飲みつつ、部屋を出る。今までに飲んだ、どんなオレンジジュースよりもおいしい気がした。

2：不幸日和

今日は何から何まで最悪な日だった。
まず朝。何故か目覚まし時計が鳴らなくて寝坊した。しかも、急いで支度をしていたら階段から転げ落ち、痛みに耐えながらも起き上がって歩き出したら、今度は足の小指を柱に強打した。
その時は「チクショー！」くらいで済んだけど……。これはまだ序章に過ぎなかった。
自転車を全速力で漕いで、何とか遅刻は免れた。でも、朝っぱらから大汗をかきながらハァハァ言ってる私は、傍から見れば大層怪しい存在だったと思う。
まあそれから教室に先生が来て、ホームルームが終わるまでは平和に過ごせた……のだけど。
最初の事件は休み時間に起きた。

「ナーナー。おっはよー」

ナナとは私の綽名で、本名は七宮陸だ。
休み時間が始まってすぐ、幼稚園から一緒の幼馴染であり親友の、大蛇森叶絵（おろちもりかなえ）が私の教室まで顔を出しにくる。少しウェーブがかった茶色の髪に、大人っぽい顔立ち。彼女とは今年クラスが離れてしまったのだが、一緒に帰ったりお昼ご飯を食べたりと、普通に交流は続いている。
叶絵は遠慮なしに教室に入ってきて（本当は別のクラスには入ってはいけないのだが、殆どの人は守っていない）、私の前の席に座ると同時に手を合わせてきた。

「お願いっ、数学のワーク見せて！」

「え、何ページ？　私らのクラスもやってるかわかんないけど……。でもさ、珍しくない？　叶絵が宿題忘れるなんて……」
「えっ、ああ、ちょっと最近寝不足でさ！　何か最近、よく眠れないんだよね、あはは！　あ、３９ページでお願いっ！」

少しだけぎこちない笑顔。大袈裟に手のひらを振って、ちょっと慌てたように叶絵が言う。？　何かあったのかな？
私は叶絵の態度に少し違和感を覚えつつ、鞄を開けて中の教科書を……。

「あれ、ナーナー？　どうしたー、ナナちゃーん？　七宮陸ー？」

色々な私の名称を連呼する。私はぎこちなく首を上げる。叶絵は、「どうした？」というようにこっちを見ている。

「ゴメン、キョーカショゴッソリワスレタ……」
「はっ？　ちょ、ちょっと鞄見せて……軽っ！」

私から鞄を奪い取り、中を確認。そして一瞬私の顔を見て、もう一度中を確認……。

「……うっわー、入ってるのがペンケースとお財布と携帯だけって……。今日何教科あんの？」
「ヨンキョウカ……。スウガクトゲンコクトリカトエイゴ……」
「あー、私それ全部置き勉してるよ。他でもないナナのピンチだし、助けてやろう！」
「カ、カナエサマー！」

持つべきものは友、という言葉が私の脳裏を過ぎる。
ぎこちない笑顔の原因も朝の疲れも、私は忘れてしまった。

不幸日和？

――キーンコーンカーンコーン。どこの学校でもありがちなチャイムがなる。それと殆ど同時に皆は席を立ち、友達と話をしたり部活へ向かったりと、各々、好きなことをやりだす。

そんな中、私はひとりで机に伏せている。泣いているわけでも眠いわけでもない。ただ、疲れた……。ああ、やっぱり今日は最悪な日だった。

叶絵に貸してもらった教科書で、何とか授業は乗り切ったのだが……。

わからない問題ばかり先生に指名されるわ（全教科で二回以上当たるとか、聞いたこと無い！）、移動教室のときに階段から転げ落ちるわ（二回目）、購買へ行ったら全ての商品が売り切れているわ、学校の近くのコンビニへ行こうとした途端に大雨が降りだすわ……。他にもまだあるのだが、思い出すのが辛いのでここまでにしておこう。

ハァ、とため息を吐きつつゆっくりと立ち上がり、隣のクラスに叶絵を迎えに行こうとした瞬間……。ピロリロリン、とメールを受信したことを告げる音が鳴った。携帯を開き、受信フォルダを確認する。差出人は叶絵。

ゴメ――――。（ノ凵、　。）　。。――――ン！！

今日用事あるから、先帰るね！　明日は一緒に帰ろ☆

……これは仕方のないこと。用事があるのは別に普通のことだし、こういう日もたまにはあった。

でも、嫌なことばかりが続いて落ち込んでいた今日の私は、そんな何でもないことが、とてもとても悲しく感じた。

――「ハァ、そろそろ帰ろっかなぁ……。……あれ？」

それから数時間後。今日に限って家にまっすぐ帰る気がおきなかった私は、学校の近くの本屋に立ち寄って適当に本を物色したり、喫茶店に入って新作のケーキを食べたりと、何をするわけでもなく街をウロウロと徘徊していた。

でも、いい加減それにも飽きが来て帰ろうとした矢先……人ごみの中に、見知った顔を見つけた。大人っぽい顔立ちの……。

「叶絵ー……！」

叶絵は私のいる方角へ歩いてきているが、まだ私には気がついていないらしい。

それにしても、どうしてこんなところにいるんだろう？　あ、もしかして、用事が終わったのかも！　予期せぬ親友の登場に、さっきまでの悲しい気分を忘れて、大手を振りながら叶絵の元へ走り出したとき……。

「え……？」

ピタリと足が止まる。叶絵の隣には、学ランを着た身長が高い男の子がいた。

一瞬、全く関係ないただの通行人かと思ったが、叶絵と楽しそうに会話をしていることから、そうではないらしい。彼氏……？
今すぐにでもこの場所から走って逃げたかったが、足が地面に縫い付けられたように動けない。その時、叶絵も私に気づき……。まずい！　という顔をしたのを、私は見逃さなかった。

「ナナ……！」
「叶絵、何で……？」
「いや、違う！　違うの、これは……」

言い訳を始めようとする叶絵。訳が分からないとばかりに、私と叶絵の顔を交互に見る男の子。
叶絵……。何で言ってくれなかったの？
私はこれ以上この場にとどまりたくなくて、足を無理やり動かし、全速力でその場から走り去る。
「待って！」と、叶絵の声が聞こえてきたが、私はそれを無視して走った。
心臓はいつもより早く鼓動し、顔がとても熱いがそれでも走った。

―「ねえナナ！　あたしらさ、秘密はなしだからね！」
―「うん、もっちろん！　ちゅーがくとかこーこーになって、彼氏とかができても報告だからね！」
―「オッケー！　絶対、約束だからね！」
―「うん！」

小さな頃の約束。遠い遠い過去の話。
そんな過去にいつまで縛られているんだと言われてしまえばそれまでだけど……。

涙が、止まらない。

3：混沌とブランコ

◆

ギィギィ。

空っぽになったオレンジジュースの缶を、近くにあったゴミ箱に投げる。カランと音をたて、缶はゴミ箱の底へと吸い込まれていった。

本部を離れて早数時間。とりあえず一番動力源になる子供が多い、異世界・混沌。通称地球に来てみたんだけど、いい子供は見つからない。まあ、そんな易々と見つかったら、私たちも困っていないわけだけど……。

ギィギィ。

不愉快な音をたてるブランコから、勢い良く飛び降りる。ギィ。無人になったブランコは、まだゆらゆらと揺れている。

今日はもう帰ろう。緊急を要するほどには困っていないのだし、面倒なことは未来の自分に押し付けてしまえばいい。

そうだ、帰る前にコンビニにでも寄っていこうか。オレンジジュースを買って、お菓子を買って、エッチな漫画を買って……。ルーロは何が好きだっけ？　色々考えながら、公園の門をくぐる。その時、突然暗がりから誰かが走ってきて、私に強烈なタックルをかました。相手は尻餅をついたようで、私もくらりと倒れかけたが、グッと足に力を込めてどうにか倒れずに済む。ふぅ、と安堵。

それにしても危ないなぁ、気をつけろよ。さすが汚れた異世界の中でも最強の汚れ具合を見せる混沌に生きる人間。クレイジーで狂ってて更にクレイジーだけど、無邪気な分だけまだ私らの世界は救いがある。でも、散々心の中で馬鹿にして見下しているのに「大丈夫？」と善人面して手を差し伸べる私も、混沌側なんだろう。まあいいや、偽善ついでに顔を見てやれ。

「す、すみません……」

声からして女の子かな。それにしても驚いた、ちゃんと謝れるんだ。「いえいえ、こちらこそ」。ニコリと作り笑顔。

だけどその笑顔は、彼女の目をみた途端、脆く脆く崩れ去ることになる。その笑顔が崩れた後、私はどんな表情をしているのかって？　それは満面の笑みですよ。

みぃつけた。

ギ。ブランコは静止した。

◆

4：くらやみにて

私は走った。

心臓は破裂するんじゃないかと思うくらいに鼓動し、頭は割れそうに痛む。顔は沸騰したお湯が入った薬缶の表面みたいに熱い。それでも私は走った。

とにかく早く家に帰りたかった。高いビル。

私が中学生の頃に作った、不恰好な表札がかかった玄関のドアを開けたい。

階段を勢いよくのぼって、昨日掃除したばかりの、まだ綺麗な部屋に飛び込みたい。

小学校の頃から使っている、お気に入りの星柄の布団にくるまりたい。

思い切り泣きたい。

早く　早く　早く　早く　！

その時、ドン、と体に重い衝撃が走った。私は予期せぬ出来事に対応できず、無様にも地面に尻餅をつく。おおッ……！　結構痛い。なんていうか……骨に響くような感覚。

「大丈夫？」

痛みに悶えていると、ふいに頭上から声が聞こえた。目の前には、暗闇でもわかるほどの色素の薄い手。そうだ、私は人にぶつかって

……！　今なら本気で顔から火が出せそうな気がする。ああもう、恥ずかしい！　自分からぶつかっておいて、謝ることすらしない上に手を差し伸べてもらうって……人間としてなんていうかこう、ああもう！　穴があったら入りたい！

でも、折角差し伸べてくれた手をとらないのも失礼かも……。そう思い、かなり今更だけれど「すみません」といいつつその手をとった。立ち上がってから、初めて相手の顔を見て……硬直。ああ、私はこの人にぶつかってしまったのか……。

サラサラとした金色の髪の毛、真っ白な肌、日本人離れした綺麗な顔……。いつかテレビで見た、ハリウッド女優よりもトップアイドルよりも、ずっとずっと綺麗な人だ。言葉を発するのも忘れて、そのまま見惚れてしまう。

普通の人なら不審がるか、それとも何かを言ってくると思うのに、彼女は彼女で何故か私の顔を驚いたように見つめている。

ちょっと恥ずかしいな（いや、恥ずかしがるほどの顔でもないんですけどね！）。私も見ておいて何だけれど、顔を逸らす。刹那、凄い力で顔が彼女の方向へ引き戻された。

「みぃつけた」

背中がゾクリと粟立つ。彼女はとてもとても嬉しそうに笑っていた。

ギ。錆びた音が聞こえてきた。

5：既視感

私は走った。
心臓は破裂するんじゃないかと思うくらいに鼓動し、頭は割れそうに痛む。顔は沸騰したお湯が入った薬缶の表面みたいに熱い。それでも私は走った。
とにかく早く家に帰りたかった。高いビル。
私が中学生の頃に作った、不恰好な表札がかかった玄関のドアを開けたかった。
階段を勢いよくのぼって、昨日掃除したばかりの、まだ綺麗な部屋に飛び込みたかった。
小学校の頃から使っている、お気に入りの星柄の布団にくるまりたかった。

とにかく、あの人から離れなくちゃ！

早く　早く　早く　早く　！

◆

「な、何してるんですか……？」
「ううん、何でもないよ。気にしないで」

数秒ほど見つめあった後、外人さん（綽名）はポケットに手を突っ込み、何かを探し始めた。
何をしているのかなあとは思ったが、気にしないで、といわれてしまったので、とりあえず黙っておくことにする。

それにしても……。改めて、外人さんを眺めてみる。さっきは錯乱していて気づかなかったが、この人、結構個性的な格好をしている。

最近、漫画やアニメのキャラクターがよく着ているのを見かける、カッコイイ黒色の軍服。勲章や装飾品がついた、とにかくカッコイイ軍服。彼女はそれを華麗に着こなしていた。身長が高くて細身だからなのか、本当に漫画やアニメの世界から抜け出してきた人のように見える。ひとつ気がかりなのは、彼女はなぜ軍服を着ているのか。これも最近はやっているらしい、所謂男装に見える。これで歩いていて、目立たないのかな……。

「あっ、あったあった！」

その時、嬉しそうな声が聞こえてきた。伏せ気味になっていた顔をあげる。目の前には、日本では持っているだけで逮捕されるらしい、アレを持った外人さんがいた。

「さぁて、まずは……」カチリと音がする。

「死んで」

バァン！　ドラマや映画の中でしか聞くことがなかった、銃声が辺りにこだました。

◆

見慣れた明かりを見つけ、少しだけ安堵する。でも、油断はできない。

あんな危ない人に家が知られたら、私だけじゃない。もしかしたら家族まで……！

恐怖に駆られた私は、そっと後ろを確認する。そこには真っ暗な世界が広がっているだけで、人影どころか猫さえもいない。私はもう一度辺りを見渡すと、そそくさとロビーに入り、エレベーターのボタンを押した（階段を使ったほうが早いかもしれないが、階段は外から見える位置に設計されていて、見つかる可能性もあるのでエレベーターを選択した）。

エレベーターは丁度一階にあったらしく、すぐに扉が開いた。中には誰もいない。私はエレベーターの中に入り、7階のボタンとドアを閉めるボタンを押す。無事にドアは閉まり、エレベーターは動き出した。

1階2階3階4階……。なんとなく、階数の表示ボタンを見つめる。その時、5階のランプが光り、エレベーターは勢いを落とし始めた。5階に知ってる人はいないなあ……。もう少しで家だということに、私は安心しきっていた。

ガー、と音をたてて開くエレベーター。

「いやー、綺麗なマンションだね。それと、さっきはごめんね？」

そこには、軍服を着た綺麗な女性が、当たり前のように立っていた。

「ひ、い……！」カチカチと歯が音をたて、体が震える。殺される、殺される、殺され……。

「いやあああああっ！」「わっ」

乗り込もうとしてきた彼女を力任せに押して、エレベーター内への進入を防ごうと試みる。彼女は突然のことに対応できず、床に尻餅をついたが、こっちは先ほど殺されそうになった身。急いでエレベーターの閉じるボタンを連打し、何とか逃げることに成功した。

また閉じられた空間の中で一人思う。何でここがわかったの……

？　額から汗が噴出し、心臓はまた鼓動を早める。一応、カモフラージュの為に８階と１２階のボタンも押しておく。
また乗り込んでこないか心配したが、それ以降、エレベーターは止まることなく順調に上昇し、遂に７階に到着した。エレベーターのドアが開く。

どこまでも続く紫色の空、青緑色の足の長い草、そして火を噴く巨大なドラゴン……。
少なくともそこは、見慣れたマンションの７階ではなかった。

6：ファンタジック☆ふぁんたじっく

紫色の空の下で、足の長い草はサラサラ音をたてて踊る。足元を白い小猫が走りぬけ、その後ろを茶色の子犬が追いかけていった。
頭上では蝶々が飛び交い、右側の小さな池では、鱗を鈍く光らせながら魚が泳いでいる。遠くでは、緑色の鱗を持つドラゴンが火を吐き出し、辺りを火の海にしていた。

何だこりゃ……。

――私の家がある七階は、少なくともこんなにファンタジックな場所じゃない。もっと無機質でシーンとしてて、たまにムカデやらゴキブリが死んでいる、ファンタジーの欠片もない場所なんだ……。そういえば最近、ムカデ踏んじゃったな。何でムカデってあんなに気持ち悪い外見なんだろう。神様がうっかり設計ミスをしたのか、それとも遊び心で創ったのか、酔っ払って作ったのか……。
その時、トンッと肩に小さな重みを感じた。途端に遥か遠くに行ってしまった意識が現実に戻ってくる。そっと隣を見てみると、そこには可愛い小鳥がいた。
小鳥はチュンチュンと囀りながらパタパタと飛び立つ。自由に、自由に。それを見ていると、少しだけ希望が湧いてきた。
そうだ、私はエレベーターに乗ってきたんだ！　つまり、もう一度エレベーターに乗ればいいんじゃないか？　振り向く、そこには……。

さっきの子猫と子犬は追いかけっこをやめ、ゴロゴロと転がりま

わっている。紫色の空はどこまでも続き、相変わらず草はダンシング。ｏｈ，ファンタジック！

ため息を押し殺し、ガクリとうな垂れる。エレベーターは無かった。

そういえば私はエレベーターから一歩も外に踏み出していない。だから今はエレベーターの中のはず。でも、３６０度７２０度回っても景色が変わらないということは、エレベーターは消滅してしまったというわけで……。

遠くを眺める。ドラゴンが小鳥を焼き鳥にしていた。

7：ばっきゅん！

何だ、あれは……？

◆

ドラゴンの真下を通り抜け、子猫と子犬を跨いで歩き、時折顔にぶつかりそうになる蝶々を払いのけ、とにかく歩いてみる。大人しくしていても仕方が無い、という考えの元で、とにかく歩く。

途中にある池を覗いてみた。澄んだ水の中で悠々と泳ぐ魚には、角が生えていたり顔がふたつあったり、どれも見たことがないものばかりだ。

池を離れて歩きだすと、今度は花が目に入った。その花は小さな子供くらいなら飲み込んでしまえそうな程大きくて、色は血を塗りたくったように赤い。更には黒い斑点模様があり、毒々しい雰囲気を醸し出している。夜中にはお目にかかりたくない。

なんとなく花に注意しながら（油断したら食べられそうな気がしたから）また進む。その時、遥か前方に紅い鳥居のようなものが見えた。

あれは何だろう？　好奇心に駆られて、私はそれに向かって走り出そうとした。しかし

「みぃつけた！　よかった、生きてたね！」

背後から聞こえてきた声に硬直。

頭の後ろに当てられる硬いもの。

「よかったよかった、やっぱりここにいた。予想通りだ、流石私！」
「それにしても、まさか、君に押し倒されるなんて夢にも思って無かったよ」
「あー痛い痛い。タックルもされたし、君にはぶつかられてばかりだ」
「正直、かなりイライラする」

カチッ、と音がする。

「そーだなー……。君が男だったら、エレベーターの時点で殺してる。女の子を殺すのは苦手だから」
「でもね、今は迷っているんだ。君を殺すか、君を生かすか」
「人殺しなんてしたら、ルーロに嫌われちゃうかなぁ。ましてや女の子だもんね」
「でも、今はそんなことがどうでもよくなるくらい、君を殺してしまいたい」
「君はいい動力源になりそうだけどなぁ……」
「ねえ、どうすればいいと思う？　君の意見を聞きたいなぁ」

耳元で囁かれる。鳥肌がたつ、冷や汗が背中を伝う、震えが止まらない、声が出ない――！

「……何も言わないってことは、私に従うと判断していいんだね？
じゃあ……」
「殺そう」

「動力源なんて、また探せばいい」
「じゃあね」

「バカ！」

バァン、二度目の、銃声。

8：甘い鉄槌

◇

仕事が一段落した後、管理局内にある庭園を散歩するのは私の日課だ。

服を脱ぎ捨て飛び込みたくなるほど澄んだ水に、その中で泳ぐ魚。毒々しい色をした大きな花（見るたびに位置が変わっている）。ある雨の日に、街でロールが拾ってきたらしい、白い子猫と茶色の子犬。

今日も変わらない、いつもの庭園。ただし、今日は異端が混じっていた。

常に携帯している、望遠鏡を使ってそれの姿を見る。茶色で少しボサボサな短い髪の毛に、黒くて大きな目。着ているものは、白いブラウスと赤いチェックのスカート。

異端の正体は、混沌に住まう住民の子供だった。

なぜ、こんなところに？　動力源候補だとしても、誰かが一人は傍にいるはずなのに……。

不思議に思った私は、それを見守ることにした。何かあったら即座に駆けつけられるよう、銃を構えて。できることなら、それを使いたくはなかったのだが……。

「バカ！」

使わざるを得ない展開になってしまった。
空に向けて発砲し、遠くにいる私の存在を伝える。全速力で走りながら望遠鏡を覗くと、そこには「あちゃー」と言いたげに肩を竦めるロールと、意識を失い、倒れる子供が見えた。……好都合だ。
邪魔になった望遠鏡を草むらに投げ捨て、はめている黒い手袋を外す。そこから現れるのは、顔無しとも住民とも何ら変わりのない普通の手だ。ロールはもう、すぐ目の前にいる。

「……どうした、逃げないのか？」人差し指をロールの額に突きつけながら、言う。
「いや、逃げたいのは山々なんだけど、逃げたらもっと酷いことになるかなーって」
「ふぅん、いい判断をしたな。もし逃げていたら……親指にするところだった」

ふん、と鼻を鳴らし、突きつけていた人差し指を下ろす。

「……処分はないの？」
「お望みなら、いくらでも下してやるが？」
「……遠慮しておくよ」
「そうか。ああ、そうだ。その子供は医務室まで運んでおけ。危害は絶対に加えるなよ」
くるりと踵を返し、手袋をはめながら投げ捨てた望遠鏡を拾いに行く。
「……ありがと、ルーロ」

背後から聞こえた声に、少しだけ頬が緩んだのは気のせいだと願いたい。
嗚呼、私はすっかり丸くなってしまった。

「そういえば、言い忘れていたが……。お前、当分オレンジジュースは禁止だ」
「えっ」

9：指とパンダとオレンジジュース

――い！　オレンジ――
――うるさい！　なん、え――

辺り一面真っ白。私はその中を、ただふわふわと漂っていた。
ああ、どこか遠くから、微かに声が聞こえる。

――じゃ、指でもい――
――な、だと！　恥をし――

指？　恥？　何のことだろう、少しだけ気になるけど……ああ考えるのがめんどくさい。
足から踝へ、踝から膝へ――体が融けていくようだ。これは、日曜日の朝、眠気に逆らわずに二度寝する時の感覚に似ているような気がする。
ああずっとこのままで居たいなぁ。そうすれば、苦しいことも怖いことも、何もしなくても済むのに……。ん？　怖いことに苦しいこと？　何のことだっけ……？

――オレンジ、為なら私――

そういえばこの声も、どこかで聞いたことがあるような気がする。
どこで聞いたんだっけ……？

白い空間がバラバラと崩れて、代わりに闇が私を包む。ああ、頭が痛い。

――いい加減にしろ！――

――じゃあオレンジジュース――

ああもう。

――本当にやるぞ！――

――オレンジジュースの為なら！――

うるさい。

――処

「うるさいっ！」

カィン！　変な音が鼓膜を貫く。

白の世界も黒の世界も、脆く脆く崩れて――。

「うわぁあああっ！」

悲鳴を上げて、私は

１０：あなたの名前は何ですか？　？叫什？名字？　Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ

◆

――「ルーロ！　ロール！　うるさいんだ！　部屋で発砲するなと何度言ったらわかる！」

隣の部屋から、迫力満点の怒鳴り声が聞こえてきた。言っていることはもっともだと思うが、彼の怒鳴り声も充分にうるさい。隣が医務室で、更には利用者がいることをわかっての行動なのだろうか。

それにしても……。

ベッドに目をやる。豪快にシーツを蹴り上げ、白いブラウスと赤チェックのスカートをぐちゃぐちゃにして眠るこの少女は、およそ１４時間前に運ばれてきたばかりだ。乱れっぱなしの茶髪。ちゃんと手入れしているのだろうか……。何となく顔を覗き込んでみた。

ぱちり。そんな効果音がつきそうな勢いで、突然、少女の目が開いた。黒い目。隣のうるさい隊長（笑）と同じだ。

◆

「ああ起きたの。おはよ、少女。あなたの名前は何ですか？」

「……？　……？」

「あれ、もしかして通じてない？　おかしいな、見た目的に、日本出身だと思ったんだけど。？叫什？名字？　Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ？　困ったな、日本語と英語と中国語以外話せない……」

やっぱり私には学が足りないのか。ここに来る前に、もっと勉強

しておくべきだった。
とりあえず、メモはとっておこう。「日本語、英語、中国語ハ通ジマセンデシタ」。あれ、そういえばボールペンはどこにしまいこんだっけ……。
とりあえず白衣のポケットに手を突っ込んでみたら、右手の指先に無機質で硬いものが触れた。それを掴んで外に引っ張り出す。……ハズレ、何の変哲もない、それはただのメスだった。それにしても、掴んだのが柄の部分で良かった。刃側だったら……あー怖い。
特に何の意味もなく、鈍い光を放つメスを眺めてみる。

「……ひっ」
「ん？」
「ひゃあああああっ！　ちょ、ごめんなさい！　殺さないでください！」

……日本語喋った。

11：誰かさんA

◆

手入れを欠かしたことがない。、慢の金色の髪の毛を白いリボンで結んで、フリルがついたお姫様みたいな服を着て、ピカピカに磨いた靴を履いて、いざ、街へ！

……と言いたいところだけれど。忘れるところだったわ、今日はまだお花に水をやってないの！

最近市場で見つけた「幸福の花」が咲くという「幸福の種」。とってもロマンチックよね。勿論、買ってきたその日に蒔いたわ。昨日見た時には蕾が開きかけていたから、今日は咲いているかもしれない。

「幸福の花」が咲いたら、何か素敵なことが起きそうな気がするの。うふふ、とっても楽しみ！

「ゲハハハ！　ゲハハハハ！　皆脱げばええんや！　ゲハハハハ！　ゲハッ」

茎を折る。

――如雨露を持って花壇に行ったら、紫色の人面花が、醜い声で下品な言葉をばら撒いていた。唯一の「幸運」といえば、この下品な花が動き回れないことくらい。とんだ「幸運の花」ね。

誰かが悪戯したのかしら？　「悪戯」で思いつく人物なんて、一人しかいないのだけれど……。

口元に手を当てて、ふと足元を見ると、土に大きな足跡が付いていることに気がついた。熊みたいに大きな足跡。こんなに大きな足跡が残るような靴を履いているのは、一人しかいない！　「悪戯」で思いついた人とも、一致するわ。

「ラギ！　出てきなさい！　もう足跡は見つけたのよ！　……もー、どこにいるのよぉー！」

嵐のように

とても大きな足跡を頼りに歩き続けた結果、たどり着いた場所は、「名無しの森」という名前の森に生えている、とある木の下だった。特別大きいわけでも小さいわけでも、何かが実っているわけでもない、何の変哲もない普通の木。でも足跡がこの木の下で途絶えているということは、きっと、この木の上にラギがいるんだわ！

「ラーギッ！　いるんでしょ？　返事くらいしなさいよー！」

力一杯木を揺すりながら、頭上に向かって声を張り上げる（女の子としてはかなり微妙な行動だけど、そのくらい、私のお花に悪戯した罪は重いのよ！）。

でも、当然といったら当然かもしれないけれど、返事はない。

そうだ、いいこと考えた。

「ふーん？　分かったわ、私が諦めて帰るまで粘るつもりね！」

木に向かって話しかけてみる。展開が早すぎる気がするけど、生憎私は気が短いのよ！

「それなら丁度いいわ。最近ね、魔法を練習してるの！　誰も実験させてくれなかったけど……」

ポケットから、折り畳まれたボロボロの紙を取り出す。

「楽式中級マ法、第７０音！」

紙を見ながら、呪文を唱える。

【鳴り止まない音、嵐のように。嵐のように激しく】

真後ろで、タンッと軽やかな音がした。

『ちょっ、ごめっ、俺が悪っ』

【ｔｅｍｐｅｓｔｏｓｏ！】

『ちょ、うわあああああッ！』

閃光　！

今更謝っても、遅いのよっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7455s/

自称ワンダーランドから

2011年9月21日22時51分発行